

市原市葉木城郭跡について

—上総の中世末期のひとつの城郭—

田 中 清 美

はじめに

房総半島のほぼ中央部、南北に細長く所在する市原市地域には現在100箇所以上の中世城郭が確認されている⁽¹⁾。日本の歴史上、表舞台に登場することは少ない地域ではあるが、江戸湾岸の湊や海を守る城郭であるともいわれる「椎津城郭跡」や大規模な山城の「真ヶ谷城郭跡」、合戦の古文書や伝説の残る「池和田城郭跡」「蟻木城郭跡」など広い市内地域で様々な地形を生かした個性的で興味深い城郭がたくさん存在している。

本稿では市内北東部に位置する市津地区の小さな城郭のひとつである「葉木城郭跡」を取り上げながら、市内の中世城郭跡のひとつの特徴を追って見たい。

1. 葉木城郭跡の研究史

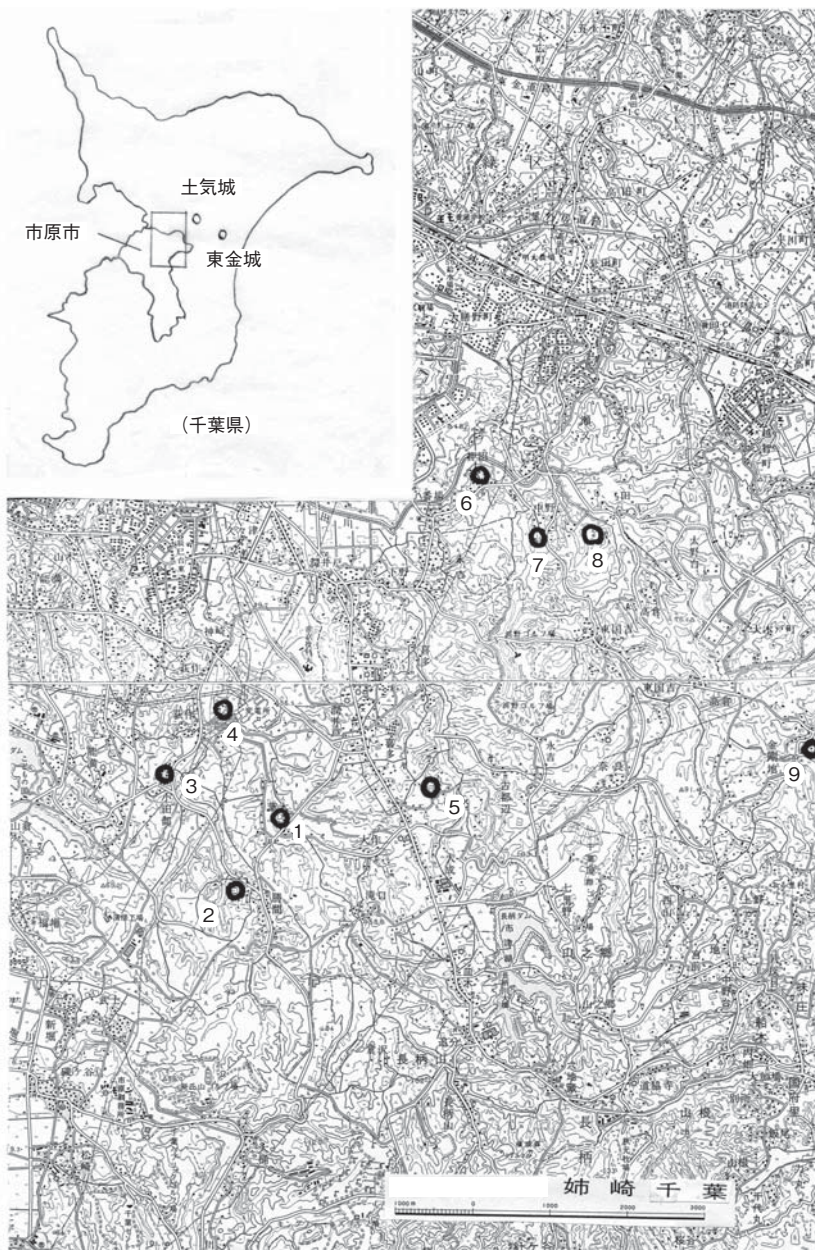
まず、葉木城郭跡について触れる前に、ここで簡単に市原市地域の中世城郭跡の研究史について考えてみたい。私論としては、大きく4期に分けることができると想定している。

I期は昭和40年代および、それ以前、特に落合忠一氏により昭和42年に発表された「市原の城郭について」⁽²⁾は市内全域の城郭を近世も含め網羅したもので、市内全体の城郭について初めて集成と解説をしている。また、昭和46年には市内の埋蔵文化財分布調査がなされカード化されている。さらに、市内で初めての城郭の発掘調査が小規模であるが椎津城郭跡の堀などで実施されている⁽³⁾。また、個別の城郭などについての小論文が「市原地方史研究」や「南総郷土文化研究会誌」などの郷土誌に落合氏をはじめ、野口博芳氏、小幡重康氏、

第1表 市原市中世城郭跡表

No	名称	所在地	No	名称	所在地
1	菊間館跡	古市場字宮前	53	高坂城跡	高坂字要害
2	瀬又城跡	瀬又字古城谷	54	山田城跡	山田字門
3	大殿館跡	大殿字堀ノ内	55	松崎館跡	松崎字的場
4	草刈城跡	草刈字六ノ台	56	大桶城跡	大桶字城山
5	八幡御所跡推定地	五所字居下	57	風戸城跡	風戸字宮ノ下
6	押沼城跡	押沼字堀ノ内	58	下ノ根館跡	中高根字下ノ根
7	白船城跡	山木字堀ノ内	59	久保館跡	中高根字下久保
8	山木城跡	山木字本郷	60	南嶺木城跡	土字字南嶺木
9	高田城跡	高田字南沢	61	土字城跡	土字字遠目塚
10	君塚城跡	君塚字堀ノ内	62	堀ノ内館跡	土字字堀ノ内
11	市原城跡	市原字要害ヶ谷	63	上高根城跡	上高根字打越
12	潤井戸館跡	潤井戸字殿向	64	馬立館跡	馬立字下沢辺
13	能満城跡	能満字城山	65	南岩崎砦跡	南岩崎字覆戸
14	高倉城跡	高倉字前畑	66	西国吉砦跡	西国吉字根本台
15	中野城跡	中野字寺沢台	67	奉免白山城跡	奉免字白山
16	岩野見城跡	岩野見字仲町	68	米沢中野城跡	米沢字中野
17	飯沼城跡	飯沼字五軒町	69	真ヶ谷城跡	真ヶ谷字要害
18	根田城跡	根田字代	70	佐是宮作城跡	佐是字宮作
19	萩作館跡	萩作字御館前	71	佐是城跡	佐是字武城
20	島野土腐館跡	島野字土腐	72	牛久城跡	牛久字天王台
21	村上城跡	村上字堀之内	73	丸山砦跡	牛久字大塚
22	金剛地城跡	金剛地字内宮台	74	石川城郭跡	石川字外車輪
23	白塚館跡	白塚字上古屋敷	75	奥野城郭跡	奥野字竹之台
24	西広城跡	西広字東	76	皆吉城跡	皆吉字上萩台
25	小田部城跡	小田部字殿ヶ谷	77	皆吉堀ノ内館跡	皆吉字堀ノ内
26	犬成城跡	犬成字湯武倉	78	大宮部田城跡	池和田字大宮部田
27	犬成向山城跡	犬成字向山	79	池和田城跡	池和田字城廻
28	山倉城跡	山倉字堂谷	80	橋禪寺城跡	皆吉字橋山
29	葉木城跡	葉木字舞台	81	下矢田城跡	下矢田字金谷
30	大坪城跡	大坪字坪内	82	光明寺館跡	池和田字大塚
31	蟻木城跡	有木字堀ノ内	83	雀ヶ崎城跡	外部田字御園生
32	小野山城跡	福増字数郷	84	外部田城跡	外部田字東台
33	妙経寺館跡	姉崎字養老町	85	岩井戸砦跡	池和田字岩井戸
34	権津城跡	権津字外郭	86	陣馬台砦跡	田尾字陣馬台
35	権津正坊山城跡	権津字正坊山	87	山口城跡	山口字松ノ谷
36	姉崎台城跡	姉崎字東原	88	山小川城跡	山小川字小関谷
37	畑木城跡	畑木字要害	89	本郷明金城跡	本郷字明金
38	海保城跡	海保字公家ノ台	90	本郷堀ノ内館跡	本郷字堀ノ内
39	宮原御所跡	宮原字おし田	91	城部田城跡	平蔵字城部田
40	神代城跡	神代字殿屋敷	92	平蔵城跡	平蔵字城山
41	分目要害城跡	分目字要害	93	吉沢城跡	吉沢字赤牛
42	引田城跡	引田字西根	94	木木城跡	本郷字上木木城
43	新堀館跡	新堀字塙台	95	大羽根城郭	本郷字大羽根
44	武士城跡	武士字堀ノ内	96	根古屋城跡	平蔵字根古屋
45	勝間城跡	勝間字滝ノ入	97	飯給堀ノ内館跡	飯給字堀ノ内
46	勝間館跡	勝間字綱城	98	古敷谷大代城跡	古敷谷字大代
47	永藤城跡	永藤字永藤	99	小草畑城跡	小草畑字結城沢
48	百牧田砦跡	不入斗字百牧田	100	月崎みさご城跡	月崎字鶴台
49	諸久蔵館跡	海保字諸久蔵	101	月崎城ノ越城跡	月崎字城ノ越
50	万台城跡	引田字上馬込	102	琵琶首館跡	田淵字白尾
51	新生城跡	新生字西萩原野	103	夕木城跡	戸面字夕木
52	磯ヶ谷城跡	磯ヶ谷字城出下			

※当表の103ヶ所の城郭は、小字名や地元の伝説などにより、明確に遺構が残存していないものも可能性として含んでいる。また、すでに開発により内容不明のまま消滅しているものもある。



第1図 関連城郭位置図 (図中の番号はP 261番号説明参照)
※ 1 が葉木城郭跡

池田忠好氏などが発表されている。

Ⅱ期は昭和50年代から60年代初めまでで、昭和55年の日本城郭体系第6巻千葉・神奈川⁽⁴⁾や昭和61年の市原市史中巻⁽⁵⁾など全国に発信するような書籍が刊行された。また、本格的な規模の発掘調査も開始され、石川城郭跡や大羽根城郭跡、村上城郭跡などの報告書⁽⁶⁾も刊行されている。

Ⅲ期は平成に入ってから様々の研究発表や発掘調査報告、さらには、千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査⁽⁷⁾が実施された。また、小高春雄氏による『市原の城』が発表されている。小高氏独自による現地調査と研究の結実した成果である。

Ⅳ期は現在まで続く、小規模ながら各地の発掘調査や発掘調査結果に基づく各種の本格的論文⁽⁸⁾の発表などである。

さて、葉木城郭跡は、市原市葉木字舞台地先ほかに所在する。東京湾に注ぐ村田川の支流大作川の上流部に位置し、湾の旧汀線からは約10km東の内陸に入った地点である。

葉木城郭跡の発掘調査は行われていないが、この城郭跡が初めて正式に紹介されたのは、「葉木砦」の名称で郷土史家の落合忠一氏により昭和46年、「市原市遺跡分布表」に記載されてからと考えられる。その調査カードには「葉木砦」の図が、しっかりした縄張図ではないが、色彩を用いてわかりやすく丁寧に記録されている。また、当時は城郭の立地が痩せ尾根状の小舌状台地を利用し、郭の構成も小規模であるため、いわゆる砦跡として紹介されているのである。

その後、研究史私論Ⅱ期に含めた昭和55年に「日本城郭体系」が出版され、鈴木英啓氏により詳細な縄張り図が示された⁽⁹⁾。同氏はさらに、市原市文化財センター紀要⁽¹⁰⁾で、大作川(堀)に沿って台地中段に点在する家々は中世様式を整えており、城郭内に所在する妙見寺と妙見神社が千葉氏との関係を強く物語っていることを説いている。しかし、小高春雄氏は、平成11年に氏の著書『市原の城』⁽¹¹⁾の中で「・・・踏査した限りでは城郭とすることに躊躇せざるを得ない。」として城郭とするには否定的であるが、中世的景観までも否定される訳ではなく、この点は後日の課題・・・とされている。

さて今回、この葉木城郭跡を取り上げようとした理由は、「なぜ、村田川上流の奥深いやせ尾根に城郭遺構？が存在するのか。」という浅学の素朴な疑問からである。

葉木城郭跡は、市原市の大部分の城郭と同じように古文書も残っておらず、誰が何のために造り、どのような顛末がこの城にあったのかが一切不明であり、何とかして、その手懸りを探って見たいと思ったからである。小稿では、次の3から5項で幾つかの事実を取り上げて、葉木城郭跡を考察してみたい。

ところで、市内に現在残っている城郭のほとんどは、いわゆる戦国時代でも終末の16世紀後半の形態を残すものである。

房総の地は、この戦国期、千葉氏・里見氏・房総武田氏・後北条氏などの勢力の狭間に位置し、葉木城郭跡の所在する市原市市津地区は、上総国市西郡、市東郡に所属し、この市津地域では戦国末期には後北条方の土気城主酒井氏の支配地域になっている。ちなみに当地域は、酒井氏のいわゆる「七里法華」の信仰が盛んな場所であり、顕本法華宗に帰依していた土気城主酒井定隆が長享二年（1488）に領内に改宗を発布したことによるものといわれ、その宗派の寺院が今でも多いことが特徴でもある。

2. 周辺の城郭等について

まず、周辺の主な城郭を見てみたい（第1図）。葉木城郭跡は、村田川の支流大作川上流部に位置し、河口からも約10kmの地点にあるが、この地域は村田川の支流が幾重にも台地を刻み、その小谷が複雑に入り込んでいる地形を形作っている。このような地形を利用して、葉木城郭跡の近くには、小田部城郭跡・勝間城郭跡・荻作館跡などが存在し、さらに周辺には、犬成城郭跡・犬成向山城郭跡・高田城郭跡・中野城郭跡・押沼城郭跡・金剛地城郭跡などが所在する。

それらの中で、小田部城郭跡は、小田部地区の現集落内にいくつかの郭や土塁などがみられる。東側に開口する2つの谷を利用して館跡を造り、西側台地上に搦め手を取っている形態と推定される。葉木城郭跡からは直線で約2kmの

地点である。

勝間城郭跡（第2図）は、北東側に開く大きな谷（館跡）を囲むように台地上に郭や堀切が残っている。また、一部には「切り岸」とも想定される急傾斜の崖も存在している。図中のAは虎口、Cは主郭部（板碑が出土したといわれている）、Dは搦め手と考えられる。葉木城郭跡からは最も近く、南西に直線で約1.5kmの地点である。

荻作館跡は字名に「御館前」があり、台地裾部に位置する寺院の満光院境内に郭状の平場が認められる。葉木城郭跡からは同じ小谷津上の下流域で直線約



第2図 勝間城郭跡縄張図

2 kmの地点である。

高田城郭跡、中野城郭跡、押沼城郭跡は、葉木城郭跡からは、およそ北東に6 km離れている。

高田城郭跡（第3図）は北側に開く小谷を館跡に利用して、その上部の台地に大きな郭を配置している。大正時代に編纂された市原郡誌には、北条氏の武将高田直勝の居城と書かれている。図中のAは虎口、Cは主郭部、Eが搦め手に相当すると考えている。

中野城郭跡（第4図）は、土塁や虎口などが小規模の残存のみであるが、それらの南側平坦な台地（光徳寺の南側）一帯に中世の墓域などの存在が広範囲に確認調査で判明している。残存状況は悪いが、主郭部は北西側台地端部かと推定される。千葉氏の配下の原氏関係の居城とも伝えられている。

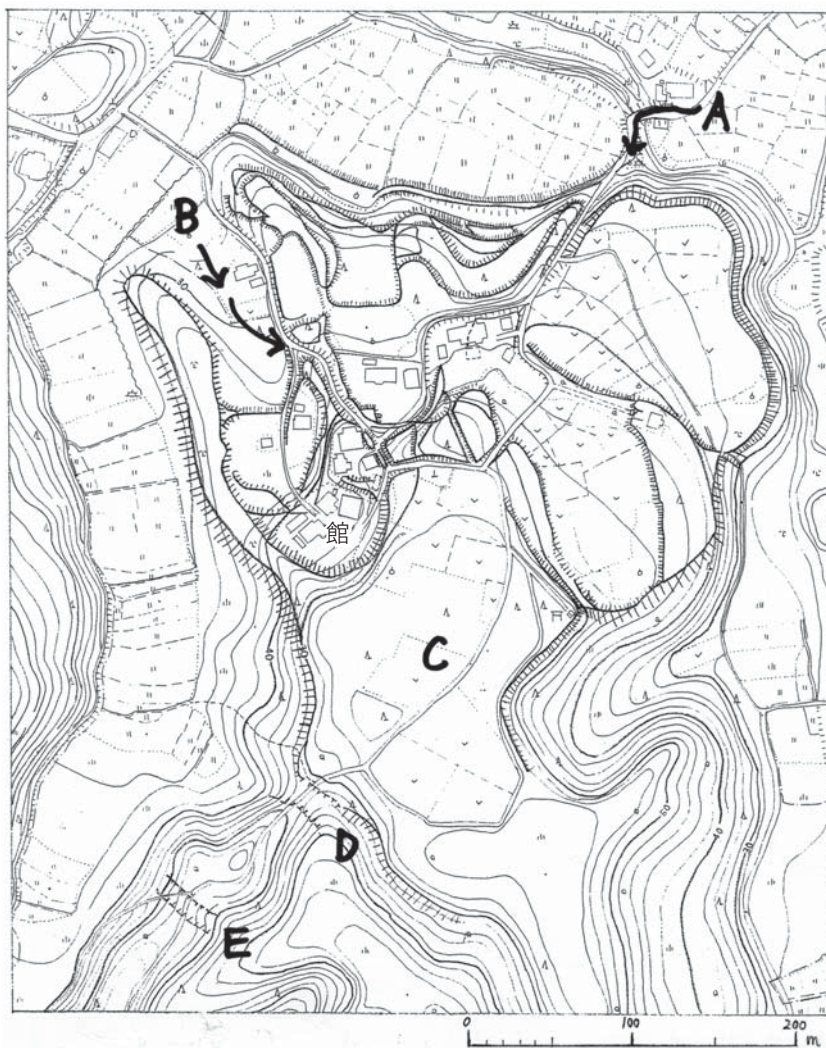
押沼城郭跡は、村田川の左岸段丘を中心に押沼集落内に郭や土塁などが認められている。

金剛地城郭跡（第5図）は、市内で最も北東部に位置し、土気城に近く、大きな堀切を利用した虎口や土塁・郭が存在し、本宮寺付近が主郭部と考えられる。土気城側の北東部分は防御が緩慢であり、犬成城郭跡と同様に土気城の出城の可能性もいわれている。

これらの中で高田城郭跡・小田部城郭跡・勝間城郭跡は、谷に館跡が存在し、その上部台地に郭や堀を配置し、いわゆる主郭部とし、さらに奥の尾根部分は搦め手としての機能もあったと考えられる形態を形作っている。いわゆる「谷戸式館跡」の範疇に入るとも思われる。特に勝間城跡は、鎌倉時代上総守護であった足利氏の所領のひとつである市西郡勝間郷にあたとみられ、その仕官の倉持氏に関係すると推定される勝間城郭跡の北西側谷津田には「コヅツミ」の(12)小字が残っている。

それらに比較すると葉木城郭跡（第7図）は、西側方面を向く瘦せ尾根を利用した形態などから、立地的には相違点はあるが、付近では根田城跡が近い形とも考えられる。(13)

特に犬成城郭跡（第6図）は小規模ではあるが、郭や土塁、堀が良く残り「合横矢」（侵入者に対して横から射かける構造）が採用されている。この構造は千



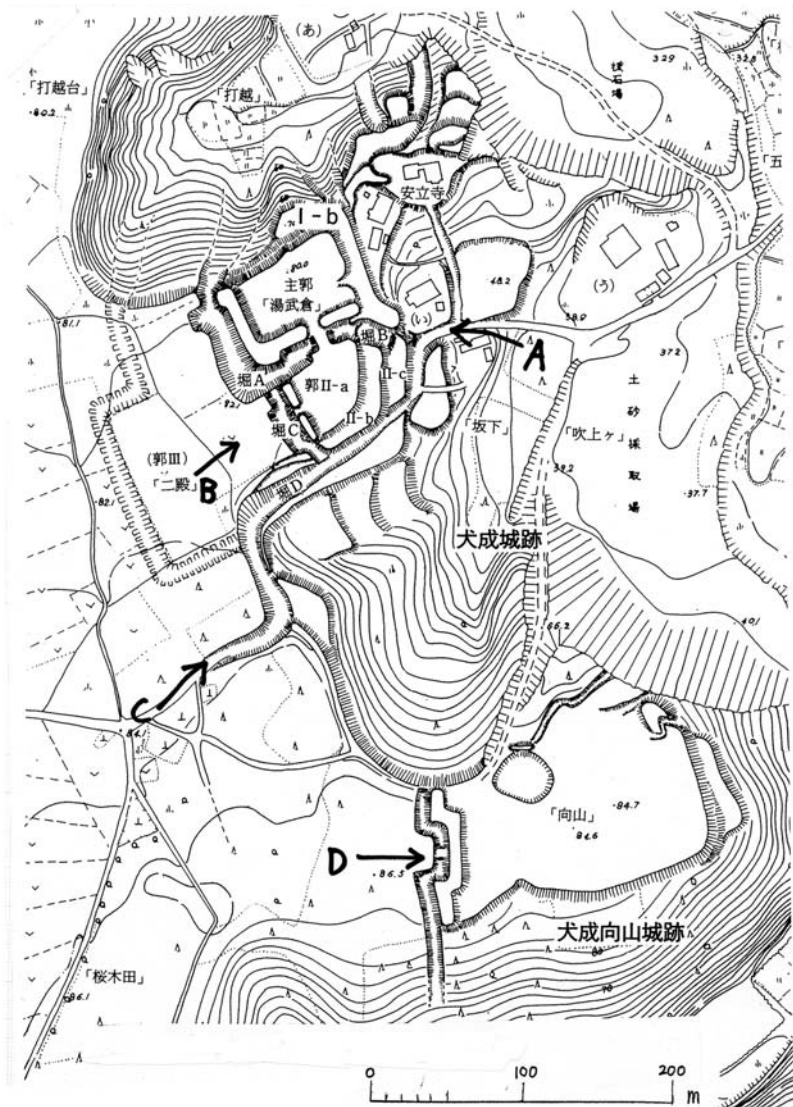
第3図 高田城郭跡縄張図



第4図 中野城郭跡縄張図



第5図 金剛地域城郭跡縄張図



第6図 犬成城郭跡・犬成向山城郭跡縄張図
 (本図の元図は田所氏作成)

葉郡の土気城郭跡や大椎城郭跡、山武地区内の坂田城郭跡に存在し、その関連性⁽¹⁴⁾が指摘されているところである。葉木城郭跡からは、東に直線⁽¹⁵⁾で約2kmの地点である。

3. 葉木城郭跡の縄張りについて (第8図)

当城郭の縄張りについては、上記の落合氏と鈴木氏が示されているが、それらの見解と現地踏査の結果を踏まえて再度ふれてみたい。

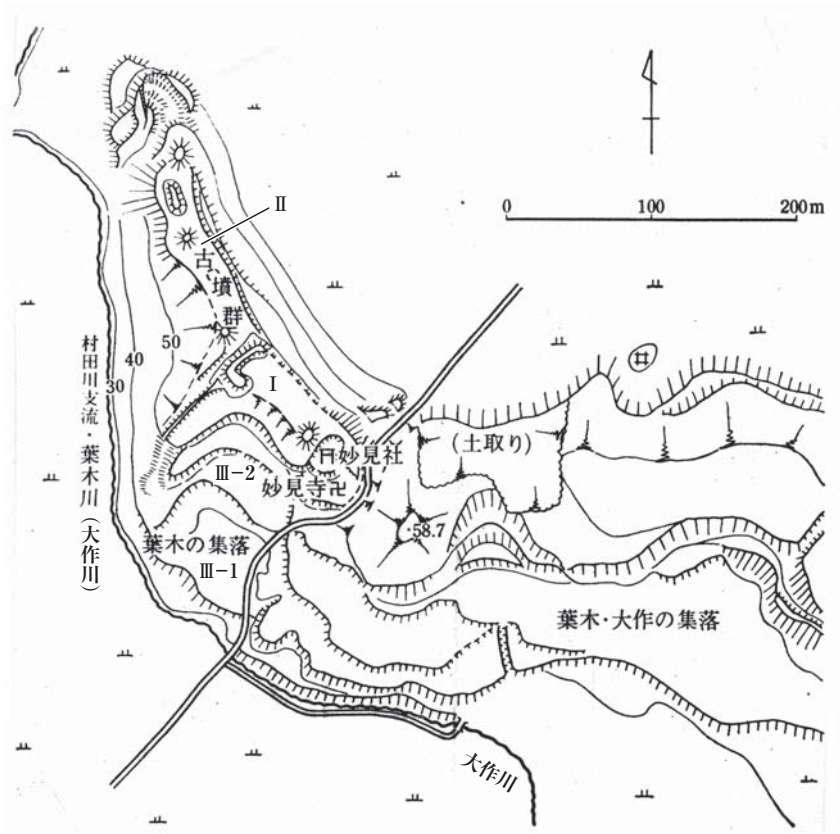
葉木城郭跡は東から北に向かって張り出す形のやせ尾根に造られている。尾根の最大標高は約60mで低地との比高は約25mを測る。規模は東西約400m、南北約250mと考えられる。

尾根先端の北側と裾部の南側と西側には虎口があり、郭も多数配置されている。南西側の台地裾部には規模や形から館跡が存在した(Ⅲ-1郭)と推定され、



第7図 葉木城郭跡地形図

現在は葉木集落の一部となっている。その北東側の上部に現在の妙見神社と妙見寺がある(Ⅲ-2郭)。また、上部には葉木舞古墳群があり、前方後円墳1基・円墳3基が確認されている。それら古墳の盛土を土塁に利用したり、物見として再利用していた形跡が窺える。この尾根の西側をⅡ郭、東側最高地点をⅠ郭(主郭部)と推定している。北東側は急傾斜面となっており、郭などの施設は認められない。丘陵の付け根方向にあたる東側は土砂採取などにより残存状態が悪いが、郭や堀切により主郭部と隔てていたと推定される。また、搦め手は東側に続く尾根伝いとみられる。このように形態からは、葉木城郭跡は大作川の小谷が延びる北側から南西側方面を意識した造りになっている。現在の丘陵を



第8図 葉木城郭跡縄張図(鈴木英啓氏作図を改訂)

南北に貫く市道建設前には堀切りが存在していた可能性があり、明治期の地図にはその堀切りを利用したと思われる蛇行する道が書かれている。しかしながら葉木城跡は、他の城郭に比較するとやや規模の小さい城といえる。また、Ⅲ-2郭の丘陵中断にある妙見社と妙見寺の存在は、鈴木氏が言われるように、千葉氏との関連性もうかがえる。

さらに、当城の占地する台地上流部東約1kmの大作地区には平安時代後期(11世紀末頃)の薬師如来(大作の薬師如来坐像)⁽¹⁶⁾が存在し、この地に古代から有力な勢力が存在したことを物語っている。

4. まとめ(葉木城とは何なのか)

以上簡単に葉木城郭跡をみてきたが、やせ尾根を利用した形態などから付近では国分寺台地区の根田城跡が比較的似ている形とも考えられる。それではなぜこの小さな城は造られたのかという当初の疑問に戻ってみたい。

地理的には葉木城郭跡は犬成城郭跡・犬成向山城郭跡と同一の台地で西側約2kmに位置するため、犬成城郭跡の西の抑え的な「出城」という見方が自然であると思われる(第1図)。

もうひとつは葉木村の「村の城」としての評価である。「村の城」とは、戦国の世に自分たちの領地である村を守るため、自衛手段として村ごとに城を造り武装して使用したものであり、また、そこを拠点に武士たちが村落の維持と支配を行っていたとも考えられている⁽¹⁷⁾。

しかし、葉木城郭跡に関しては、地理的な位置関係から犬成城郭跡の補完施設としての機能も捨てきれないのであり、「村の城」と「出城」の二つの機能もっていた可能性を本項では想定しておきたい。「村の城」は経済拠点であり領地支配を実現するもの、「出城」は軍事拠点のひとつである。

造られた時期としては、戦国末期の里見方としての対後北条氏の頃か(田所2007)、またはそれ以後の後北条方としての対豊臣氏の頃かとも考えられる。

また、妙見神社と妙見寺の存在は、当然それら以前に酒井氏の支配下で築城が行われていたことも伺わせる。

さらに、おのずと小田部城郭跡・勝間城郭跡・萩作館跡など近接する城郭との有機的な関連性も捉えておく必要があり、犬成城郭跡の性格の研究とともに、葉木城郭跡の性格を考える上での今後の大きな課題となる。

市内には冒頭に触れたように、多くの中世城郭跡が存在しているが、椎津城郭跡など、わずかな城郭を除き、ほとんどが発掘調査の結果などを含めた詳細な分析がなされておらず、中世後半を中心とする大きな課題のひとつになっている。

今回は発掘調査がなされていない中で、古文書なども認められていない、ひとつの小城郭を縄張りや近辺の城郭との関係など、わずかな資料により、その性格や造られた意義などを大胆に推測したもので、上総の中世末期のひとつの城郭として簡単な考察を行った。

註

- (1) 第1表
- (2) 落合忠一「市原の城郭跡について」『市原地方史研究第3号』1967 市原市教育委員会
- (3) 伊禮正雄「椎津城の歴史<本丸跡と内濠の試掘について>」1968 市原市教育委員会
- (4) 『日本城郭体系 千葉・神奈川』1980 新人物往来社
- (5) 『市原市史中巻』1986 市原市
- (6) 鈴木英啓「石川城郭跡」1984、「大羽根城郭跡」1986、山口直樹「村上城跡」1986 (財)市原市文化財センターなど
- (7) 『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ一旧上総・安房国地域一』1996 千葉県教育委員会
- (8) 櫻井敦史「八幡・五所地域の石造物」『市原市文化財センター研究紀要Ⅲ』1995など多数の論文がある。
- (9) 鈴木英啓「葉木城跡」『日本城郭体系 千葉・神奈川』1980 新人物往来社
- (10) 鈴木英啓「私の考古学日記」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』1993
当稿は、故鈴木氏が書き残した資料をまとめたものである。
- (11) 小高春雄「市原の城」1999
- (12) 高村隆「第1節 上総国の守護足利氏と市原」『市原市史中巻』1986 市原市
永仁四年(1296)三月十二日など「足利貞氏下文案」(倉持文書)「勝間郷内小堤(コ

ヅツミ) 田畠]

足利氏所領で、その管理権を「祖母一期」に限り、被官の倉持氏に安堵したことが書かれている。

- (13) 大村直「第4節中近世」『市原市根田代遺跡』2005(財)市原市文化財センター発掘調査の結果では、城郭遺構は認められていない。
- (14) 小高春雄「土気城跡」など1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ-旧下総国地域一』
- (15) 小高春雄「45 犬成城跡」『図説房総の城郭』千葉城郭研究会編 2002 田所真「第三十七話 謎の城跡」『房総及房総人』通巻865号 2007 南側の隣接する台地には、犬成向山城郭跡も存在する。
- (16) 明珍照二、紺野敏文『指定有形文化財修理報告書—仏像彫刻編—』1991 市原市教育委員会
- (17) 鈴木英啓氏は、市内には当時の村数に対して同数の城郭跡が存在する可能性を記している。(注10)

【参考文献】 順不同

- 鈴木英啓 1993「私の考古学日記」『市原市文化財センター研究紀要Ⅱ』
- 小高春雄 2002「45 犬成城跡」『図説房総の城郭』千葉城郭研究会編
- 小高春雄 1999「市原の城」
- 田所真 2007「第三十七話 謎の城跡」『房総及房総人』通巻865号
- 鈴木英啓 1980「葉木城跡」『日本城郭体系 千葉・神奈川』新人物往来社
- 井上哲朗 1994「コラム 戦国の村と領主」『房総考古学ライブラリー 8 歴史時代(2)』(財)千葉県文化財センター
- 小高春雄 2003「市原の古城社」『市原地方史研究第20号』
- 高村隆 1986「第1節 上総国の守護足利氏と市原」『市原市史中巻』市原市
- 小川浩一 1998「16.中野寺沢台遺跡」『市原市文化財センター年報平成7年度』
- 近藤敏 2005「第5節中野寺沢台遺跡」『市原市市東地区遺跡群』(財)市原市文化財センター
- 黒田基樹 2006『百姓から見た戦国大名』(株)筑摩書房
- 藤木久志 2010『中世民衆の世界一村の生活と掟』(株)岩波書店
- 藤木久志 2005『刀狩り—武器を封印した民衆—』(株)岩波書店
- 原田信男 2008『中世の村のかたちと暮らし』(株)角川学芸出版
- 千葉中世城郭研究会編 2002『図説房総の城郭』(株)図書刊行会
- 石井進、宇野俊一編 2000(『千葉県の歴史』株)山川出版社

市原郡教育会 1921『市原郡誌』

千葉中世城郭研究会編 2005『城郭と中世の東国』高志書院

シンポジウム戦国の城と年代観—縄張研究と考古学の方法論—資料集

2008 帝京大学山梨文化財研究所

千葉県教育委員会 1995『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅰ—旧下総国地域—』

千葉県教育委員会 1996『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書Ⅱ—旧上総・安房国地域—』

図1の番号説明

1 葉木城郭跡 2 勝間城郭跡 3 小田部城郭跡 4 荻作館跡 5 犬成城郭跡、犬成向山城郭跡 6 押沼城郭跡 7 中野城郭跡 8 高田城郭跡 9 金剛地城郭跡

なお、普段より、無力怠慢な私に対して叱咤激励し、ご指導ご協力等をいただいている酒井清治、大村直、櫻井敦史各氏に御礼申し上げます。

また、各城郭の現地踏査による縄張図は田所真氏のご協力を得た成果である。

さらに、学兄である柴田龍司氏、小高春雄氏、井上哲朗氏、津田芳男氏、梁瀬裕一氏に感謝申し上げますと共に、本稿を故鈴木英啓氏に捧げるものであります。

当論考は、市原市埋蔵文化財調査センターホームページの研究ノートに掲載した「市原市葉木城郭跡について（予察）」を加筆改訂したものである。

最後になりますが、寺前直人氏には拙稿を掲載させていただき感謝いたします。